

幼年時代の演劇体験

富田博之

大学生の〈演劇体験〉調査から

東京のある私立大学の文学部の共通科目の一つとして、「演劇教育入門」という講座を担当して三年になる。講座の内容は、つぎのようなものだ。

「人間関係成立の基礎となる表現とコミュニ

ケーションの感覚・能力は、演劇活動をとおして、もっともよく身につくといえます。演劇教育とは、それをめざす活動ですが、その理論と方法を実習を交えながら学習します。」
(履修要項から)

この講座には、年ごとに漸増して、ことしで、文学部の各科から集まってくる一五〇名ほどの学生(男女比は三対七ぐらいで女子学

生が多い)が受講しているが、例年、講座の初めに、学生を対象に、ちょっとした調査をさせてもらうことにしている。レポート用紙一枚に、つぎのような三つの〈演劇体験〉について書いてもらうのである。

(A)これまでの〈演劇活動体験〉(どんな劇をつくる活動に参加したことがあるか)

(B)これまでの〈演劇鑑賞体験〉(どんな劇を見たか)

(C)これまでの〈戯曲体験〉(どんな戯曲・脚本を読んだか)

右の三項目について、簡潔にレポート用紙に書いてもらうのだが、このうち、(A)の〈演劇活動体験〉では、幼稚園や保育園での体験も、あれば書いてくれるようにコメントするせいもあるが、大半の学生が、就学前の幼年代の演劇活動体験について書いている。

記入例を原文のまま少し紹介すると、つぎ

のようなものだ。

▽私は幼稚園のお遊戯会で「青い鳥」のお母さん役をやり、その後は小学生の時、作者は忘れましたが「折り鶴」という劇をやって以来ほとんどやっていません。(日本文学科二年、女子)

▽幼稚園の時、「白雪姫」で白雪姫をやって以来、何も芝居らしいものはないけれど、ちょっと分野は異なりますが、高校でモダンダンス部に在籍して、ステージ発表を何度かやりました。(英米文学科二年、女子)

▽幼稚園でキリスト誕生のクリスマスの劇を演り、小学生の時「みにくいあひるの子」をオペレッタで演って以来今日まで直接演劇には参加していません。(英米文学科二年、女子)

▽私の演劇経験の始まりをたどると幼稚園にまでさかのぼります。演劇教育を実践し、

毎月一回くらい、自分達で筋を決めて、半即興劇のようなことをしていました。そのせいか小学校でも演劇部で、中高は五年間（高3は引退してしまうので）演劇部でした。（下略、心理学科三年、女子）

▽保育園のとき「かかし」の役をやりました。ただ立っていただけですが。（史学科二年、男子）

▽幼稚園の学芸会でカラスのお父さんをやりました。高校の時、宮沢賢治の「風の又三郎」の演出と、テーマ音楽の作曲を手がけました。（教育学科二年、男子）

▽幼稚園では子坊主の役、小学校ではリア王の役、「ロミオとジュリエット」の牧師役、「シンデレラ」のいじわるな姉の役をやりました。（ドイツ文学科二年、女子）

ごく一部を紹介したが、大半の学生たちは、ほぼ同じような〈演劇体験〉をしている

といつてよい。短い時間の、ごく簡単な記述を要求するだけの調査だから、右のようなものではあるが、学生たちにとって、幼稚園・保育所での演劇体験は、かなり強い刺激となつて記憶されていることがわかる。「青い鳥」の母さん役とか、白雪姫とか、子坊主の役とか、演じた役割をはっきり書いていることからも、それが、かなり鮮烈な体験として記憶されていることがわかる。お話を聞いたり、絵本を読んだりした体験と比べても、〈演ずる〉ことの体験が、幼年時代の体験として、いかに強い印象を残すものかをうかがうことができるといつてよいのではないだろうか。それにしても、「自分たちで筋を決めて、半即興劇のようなことをしていました」という学生のケースをのぞいて、他のは、どんなやりかたで演じられたものかが、ほぼ推察することができるといつてよさそうである。

「青い鳥」や「白雪姫」や、ただ立っているだけの「かかし」の役をやったというところなどから、それは、うかがえるのである。おそらく、脚本によるセリフを与えられ、それを暗誦するような方法で演じさせられた「お遊戯会」や「クリスマス会」の劇だったのであるまいか。学生たちの短く書かれた「演劇活動体験」の調査からも感じとることができるが、学生との対話をとおして、それを確かめることができたのである。

だが、こういう状況は、この学生たち（六〇年代の前半に生まれている）だけではなくて、いまの子どもたちにも、変わらずにみついているものとみてよいようだ。

幼年時代の「演劇活動体験」は、学生たちの調査からもうかがえるように、強い印象となつて残る体験であることは確かだが、その活動のありかたが、そのままよいとはいえない。

ない。では、なぜ、そのままよいとはいえないのか。それを考えてみたいというのが、本稿の目的の一つである。

幼年時代の「観劇体験」

この学生の演劇体験調査で、幼年時代の「演劇活動体験」については、多くの学生が書いているのに対して、「演劇鑑賞体験」については、あまり書かれていなかった。劇場や幼稚園で、人形劇や児童劇を見た体験を書いている学生もいたが、その数は、たいへん少なかった。それも、劇の題名が書かれていないのである。劇をやった体験では、題名だけでなく、役名も書かれているのと比べて、大きなちがいである。そのちがいは、劇をする体験が幼稚園・保育園時代以後は少いのに対して、劇を見る体験は、むしろ、それ以後

の方が多いか、あるいは、最近の体験にもあるところから、幼年時代の観劇体験が調査にはあらわれてこないということによるのではないかと思う。

幼稚園・保育園時代の観劇体験も、決して少いわけではない。むしろ、いまの学生たちが幼児の時代である一九六〇年代の後半から、幼稚園や保育園の子どもたちを対象とする児童劇団や人形劇団の活動が活発になり、いまも、それはつづいている。

幼稚園・保育園側の調査ではないが、児童劇団や人形劇団が、幼児を対象とした公演をどれだけおこなっているかという一つのデータがある。

職業的な専門劇団の組織体である「日本児童演劇劇団協議会」(略称「児演協」という団体があるが、これに加盟している劇団は六七にのぼる。このうちの六三劇団が、昨年一

九八四年度中に、どれだけ公演をおこなったかという記録がある(児演協の機関誌『児演協』28号)。そのうち、全国の幼稚園・保育園でおこなわれた公演回数と観客数は、つぎのとおりという。

実施園数 五、九六四園

公演日数 三、七八四日

公演回数 六、五〇八回

観客総数 八八九、九五九名

幼稚園・保育園の総数からいえば、公演をおこなった園の数や、観客数は、それほど大きくとはいえない。文部省と厚生省の調査によると国・公・私立の幼稚園数は一五、二一一園、園児数は二、一三二、六八一名(一九八四年五月現在)、保育園は二二、八五八園、園児数は一、九二五、〇〇六名という(平凡社刊『世界大百科年鑑』一九八五年版)。この数字からいうと、公演をおこなった園の比

率は一六%弱、観客園児数も二二%にすぎない。

だが、児演協に加盟している劇団は、幼稚園・保育園を対象に活動している劇団の一部であり、それと同じ、あるいはそれ以上の数の劇団が活動していると推定されるので、この比率は、少くとも二倍以上にはなるだろう。

また、幼稚園・保育園以外でも、子どもたちは観劇体験をしている。たとえば、全国にひろがっている「子ども劇場・おやこ劇場」での公演は、先の児演協調査で二、六六二回、一、三四九、一五〇名の観客数というがこれには多くの幼児がふくまれているとみてよいだろう。その他にも幼児を対象とした演劇公演は少なくないから、幼年時代の観劇体験は、総体として、かなりの比率をしめるものとみてよいと思う。

これだけひろくおこなわれている幼稚園や保育園での演劇活動体験が、子どもたちにとって、どんな意義をもち、また、演劇鑑賞教室の実態（どんな劇団が、どんな演目で公演しているか）は、どうなっているかということなど、あまり知られていないのではないかとと思われる。それについて書くことも、本稿の目的の一つである。

さらにいえば、幼児と演劇についてのかかわり——幼児にとって演劇とはどんな意味をもつものか——についても考えてみたい。そのため、幼児と演劇とのかかわりの歴史をふりかえってみたい。それも、また、本稿の目的の一つとしたいと思う。次回は、幼児と演劇とのかかわりは、どこから始まったかについて書くことにしたい。

（児童演劇研究家）